

# 能声楽家の青木涼子が、日仏で高評を得た 馬場法子のオペラ「Nopera AOI葵」をスイス初演

取材・文/船越清佳（音楽ライター）



能声楽家・青木涼子の存在は、これまで世界20カ国50人を超える作曲家にインスピレーションを与え、謡と現代音楽を融合した数々の新作を実らせてきた。古典伝統の本質を貫きつつ、「能」に新境地を創造した作品は、欧米の聴衆の知的好奇心を刺激し、日本文化の再発見につながっている。

重要なパートナーの一人、馬場法子が作曲したオペラ「Nopera AOI葵」（謡と室内楽アンサンブルのため）は、能「葵上」を題材とし、すでに日仏で高い評価を受けた作品。ローザンヌで行われたスイス初演（2月27日、28日、3月1日・ヘテアトル2・21）は、聴衆に深い余韻を残す3日間となった。馬場が今年度コンポーザー・イン・レジデンスを務めているローザンヌ高等音楽院の学生アンサンブルが伴奏（2名の打楽器奏者は立役として登場）を担い、初めて「能」と接したヨーロッパの若者たちから、青木がさらなる表現力を引き出したことも特筆したい。

青木が演ずるのは、怨霊となって葵上を苦しめる六条御息所。能に做って、ステージの前方には病床の葵上を暗示する着物が置かれている。梓弓に呼び寄せられた（糸電話を使用）六条の霊は妖しくも幽玄で、青木の姿に会場の空気ははりつめたものへと一変した。馬場は、イメージした音を創造する

ために、意外な日常オブジェも楽器と同列に取り入れており、本作品も自然界の音や霊の気配など、目に見えないものを喚起する力に富んでいる。ドラマが進むにつれてその効果は水際立ち、青木の謡がえぐりだす情念と一体化していった。

霊界と交信する糸電話（ステージ右側に糸が張られている）を擦る音は、嫉妬に軋む女心そのもの。六条の語る恨みつらみが、ペットボトルや梱包素材のプラスチックの突起をつぶす音と不気味に波長を合わせて、呪術のごとく鬼気迫る。源氏への狂おしい思いは、現代のツール携帯電話に託され、愛と女心のテーマは遠く時代を隔ても普遍であることを象徴する。不実な男にメッセージを送信し続ける電子音の模倣が、聴き手の胸もかきむしる。鬼と化した六条と僧の戦いで、祈禱を表す音楽が鬼の謡を凌駕する瞬間、そして六条が成仏する場面で糸電話の軋みが高まり、目前で霊界の扉がゆっくりと閉じていくような終盤も圧倒的。また、2回挿入されたパーセルのオペラ「デイドとエネアス」のアリアが、本来は賢く典雅な六条の姿を記憶に蘇らせて、哀しくも秀逸であった。

古典芸能を未来へつなぐという青木の透徹した志を核に、最先端の才能とセンスが交錯する作品群は、聴衆を幻想世界の实体经济へと導く。そこに広がるのは「東洋と西洋の融合」という表

現が常套と感ぜられるほどに、驚きと魅惑に満ちた境地だ。「Nopera AOI葵」は、それを体感させてくれた公演であった。

——今回はローザンヌ高等音楽院の学生たちが室内アンサンブルを担当しましたが、彼らが青木さんの存在に刺激を受け、舞台上で強く感情移入しているのが伝わってきました。

**青木涼子** 若い奏者の方々が柔軟に、そして全身全霊に取り組んでくださり、短期間で質の高い公演が仕上がったと思っています。音楽院の現代音楽の授業中に、今回の素晴らしい指揮者ギヨーム・ブルゴーニュさんの元ですでに練習が進められていましたし、演出のリハーサルも演奏と共に行われたので、馬場さんから貴重な助言をいただくこともできました。



作曲家の馬場法子さん（左）と能声楽家の青木涼子さん（右）。馬場さんは昨年、栄誉あるフランス芸術院の作曲賞の一つ「フロラン・シュミット賞」を授与された

公演前日のリハーサルには、ローザンヌの小学生たちが見学に訪れました。感銘を受けたのは、彼らが「能」について学習するだけでなく、あらかじめ馬場さんの作品も鑑賞して来られていたことです。改めて教育の大切さを思いました。今は理解できなかつたとしても、将来子どもたちにとって、このような経験が日本文化に興味を持つきっかけとなるかもしれないかもしれません。音楽院では、声楽科の学生さんを

対象にワークショップも行いました。男女とも普通のオペラ歌手の方々が、地声を使う謡に抵抗があるのではと危惧したのですが、皆さんが舞だけでなく、謡も積極的に実践してくれたのです。日本のほうが、能に対して「ハードルが高く厳しそう」と身構える傾向が強いかもしれませんが。ヨーロッパの聴衆は、通常のコンサートで現代音楽に慣れている分、公演を音楽として客観的に楽しんで聴いてくださっているように感じます。聴きに来たコンサートに私が出演していて、能に出会う、という感じでしょうか。

——馬場さんとは「作曲家のための謡の手引き」を制作されたそうですね。海外の作曲家の作品も含め、題材はやはり能の演目が多いのですか？

**青木** 手引きの制作は、私にとっても作曲家が必要とする要素を認識する機会でしたし、サイトを開設して以来、謡の規範から極端に外れた作品をいただくことはなくなりました。

海外の作曲家にとって、伝統的な能の演目を題材とするのは、原作に対する深い理解がないとやはり難しいですね。作品によっては英語、また古代ギリシャ語で謡うこともありますし、作曲家の方々に能を聖域にすることなく、自由に素材を使って彼ら本来の音楽を書いていただきたいと思っています。

す。

——「Nopera AOI葵」は、音楽を伴って六条御息所の心理が一層リアルに胸に迫りました。いつか能の「葵上」も鑑賞してみたいです。

**青木** 能は、視覚への情報がとても少ない芸術ですから、見る側も記憶や想像力を動員する必要があります。芸の力と観客の想像力がうまく結びついた瞬間、低い声の恰幅の良い男性が、絶世の美女に見える……この「イメージネーションが生む空間」に、私は現代音楽との親和性を感じるので。

現代ではエンターテインメント的な演目が好まれる傾向がありますが、私が求めるのは、作曲家と私、双方が妥協なく理想をぶつけあって生まれる作品です。それを音楽として味わっていただくことが、能の世界への扉につながればと思っています。

——今後の馬場さんとのコラボ作品について教えてください。

**青木** 紫式部をテーマに、謡とギターのための作品をお願いしています。2026年1月に東京のKAZEN HALLにてギターの村治佳織さんと世界初演する予定です。プライベートなホールなので、一般非公開なのですが、今からとても楽しみにしています。